

# 古いてさげかご

小川未明

青空文庫



ずつと前まえには、ちよつと旅行りょこうするのにも、バスケットを下げ  
てゆくというふうで、流りゅうこう行こうしたものです。年としちやんのお家うちに、  
その時じぶん分ぶん、お父とうさんや、お母かあさんが、お使つかいになつた古ふるいバスケ  
ットがありました。

年としちやんが、ある年としの夏なつ、お母かあさんにつれられて田舎いなかへいつた  
ときには、このバスケットにりんごや、お菓かし子こを入れて持もつてゆ  
きました。そして、帰かえりには、お土産みやげのほかに、海かい岸がんで拾ひろつた  
石いしころや、貝かいがらなどを中なかへいれて、汽き車しゃに乗のると、このバスケ  
ットを網あみだなの上うえに載のせておきました。

年としちやんは、お母かあさんや、妹いもうとのたつ子こさんと汽き車しゃの窓まどから、青あ

おあお  
々とした外の景色をながめていきますと、遠い白雲の中で、ほ  
かほかと電がしていました。そのとき、汽車は、全速力を出  
して走っていたので、頭の上の網だながギイギイと音をたててい  
ました。そのたびに、バスケットも揺れています。年ちゃんは、  
「あのかごに、青い石や、赤い貝がらが入っているのだな。」と、  
なんとなく楽しかったのです。

お家へ帰ると、バスケットに入っていたものは、みんな出され  
てしまいました。

「もう、このかごは、使いませんね。」と、いって、お母さんは、  
バスケットを日に当てておしまいになりました。

その後のことでした。写真の入り紙の箱が、写真を

出したり、入れたりするうちにこわれたので、お母さんは、写真  
 真をこのバスケットの中へお移しになりました。写真入れと  
 なったバスケットは、茶の間のたなの上に置かれたのです。平  
 常は、だれも、それに気をつけるものもなかったのです。

バスケットは、そこでほこりがかかり、だんだん古いうえにも  
 古くなって、金具もさびてゆきました。

あるとき、お母さんは、たなの上をそうじなさってバスケット  
 をお下ろしになりました。

「この中へ、なにが入っているでしょう？」と、お母さんは、写  
 真が入っているのをお忘れになったのです。

「古い写真が入っているのよ。」と、お姉さんが、いいました。

「あ、そうだったね。」と、お母<sup>かあ</sup>さんは、思い出し<sup>おも</sup>になりました。「どれ、見<sup>み</sup>ようか。」と、兄<sup>にい</sup>さんは、いつて、バスケットをあちらへ持<sup>も</sup>ってゆきました。

年<sup>とし</sup>ちゃんも、そのそばへゆきました。かわいそうに、バスケットの金具<sup>かなぐ</sup>がとれかかっています。

「あ、かぎをかけるところが、こわれているよ。」と、年<sup>とし</sup>ちゃんが、いいました。

「いいよ、もう使<sup>つか</sup>わないのだから。」と、兄<sup>にい</sup>さんは、それを問<sup>もん</sup>題<sup>だい</sup>にしませんでした。

年<sup>とし</sup>ちゃんは、一昨<sup>さくねん</sup>年の夏<sup>なつ</sup>、田舎<sup>いなか</sup>へいったときのことを思い出<sup>おも</sup>しました。

「あのときは、まだバスケットは、こんなでなかったのになあ。」  
と、<sup>おも</sup>思うと、<sup>かな</sup>なんだか悲しくなりました。

「このはかまをはいているのが、お母さんなの？」と、お姉さん  
は、一枚の古い写真を取り上げていいました。

「そう、お母さんだ、お母さんにも、こんな時代があつたのかなあ。」と、兄さんは、笑いながら、見つめていました。

「僕にも、昔のお母さんを見せてよ。」と、年ちゃんは、その写真を奪うようにしてながめました。それは、お母さんが、髪をお下げにした、女学生の時分の写真でした。その他、お母さんの、その時代のお友だちの写真や、叔母さんのや、また年ちゃんの赤ん坊のときの写真などが、いろいろと出てきました。

「さあ、見<sup>み</sup>たら、そこへちらかしておかずにバスケットの中<sup>なか</sup>へ入れておいてくださいね。」と、お母<sup>かあ</sup>さんは、注<sup>ちゅう</sup>意<sup>うい</sup>なさいました。みんなは、お母<sup>かあ</sup>さんのいいつけを守<sup>まも</sup>つて、取<sup>と</sup>り出<sup>だ</sup>した写<sup>しゃ</sup>真<sup>しん</sup>をバスケットの中<sup>なか</sup>へ入<sup>い</sup>れて、もとのところへ載<sup>の</sup>せておきました。

バスケットは、たなの上<sup>うへ</sup>で独<sup>ひと</sup>り言<sup>ごと</sup>をしたのです。

「やれ、やれ、私<sup>わたし</sup>も、長<sup>なが</sup>い間<sup>あいだ</sup>、よく働<sup>はたら</sup>いたものだ。若<sup>わか</sup>いときは旅<sup>り</sup>行<sup>ようこう</sup>もしたし、また重<sup>おも</sup>いものも入<sup>い</sup>れて運<sup>はこ</sup>んだりした。そして、つらいこともおもしろいこともあつた。いまは、こんなに年<sup>とし</sup>をとつて、写<sup>しゃ</sup>真<sup>しん</sup>入<sup>い</sup>れにされてしまったが、いよいよこれが終<sup>お</sup>わりかなあ。」と、ため息<sup>いき</sup>をついていました。

バスケットが、そう思<sup>おも</sup>つたのも無<sup>む</sup>理<sup>り</sup>がありません。ところが、

ある日、年ちゃんのお家でねずみが出るので、知ったお家から、ねこの子をもらうことになりました。

その家は、遠方なので、電車とバスに乗らなければなりませんでした。

「さあ、どうして連れてこよう？」と、みんなが、考えていますと、

「ああわかった、あのバスケットへ入れてくればいいだろう。」と、年ちゃんが、いいました。

「なるほど、あの中へ入れてくればいいわ、そして、あのかごをねこのかごにするといいのね。」と、お姉さんは、いわれました。

そのねこの子を、年ちゃんとお姉さんの二人でもらいにゆくこ

とになりました。

いよいよその日になると、バスケットは、たなの上から下ろされて、写真は、用だんすのひきだしの中へ場所換えをしました。「きょうから、私は、かわいらしいねことお友だちになれるのだ。」と、バスケットは、喜びました。

しかし、ねこを入れてくるのには、バスケットは、具合がよかつたけれど、ねこのかごにはなりませんでした。それで、年ちやんの学校でお点をつけていただいた、綴り方や、書き方の答案などを入れておくものにされました。

考えると、一つのバスケットにも、一代にはいろいろのことがあるものです。





# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「ドラネコと烏」岡村商店

1936（昭和11）年12月

※表題は底本では、「古《ふる》いてさげかご」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 古いてさげかご

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>